

Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.12 December 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
言語の違い
／永尾教昭 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (29)
新型コロナウイルスと日本語教育③
／大内泰夫 2
- ・ イスラームから見た世界 (8)
神に対する信仰—礼拝 (サラート)
／澤井 真 3
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (27)
研究者・学者・知識人—“学問行路の諸段階”
／金子 昭 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—(26)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑨
／成田道広 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (64)
大和の文化遺産を学ぶ②—廬舎那仏に捧げられた
正倉院宝物
／桑原久男 6
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教えの伝播— (13)
5. コロンビアの体質 4
／清水直太郎 7
- ・ ヴァチカン便り (47)
法王、同性愛者の“結婚”を容認
／山口英雄 8
- ・ ニューヨーク通信 (7)
雅楽と文化協会
／福井陽一 9
- ・ 思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (10)
／八木三郎 10
- ・ 2020 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学
ぶ (6)
第1講：75「これが天理や」
／永尾教昭 11
- ・ 2020 年度公開教学講座の案内 12

巻頭言

言語の違い

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

前号の巻頭言では、海外布教は日本で生
育した植物を、海外の地でも育ち繁殖して
いくようにやや品種改良することだと述べ
た。それは日本と海外では土壌の質が違
うからである。

つまり、教理そのものを変えるのはお
かしいが、それに付随するもの、例えばその
宗教の組織、服装、慣習等々を、文化、風習、
歴史などがまるっきり違うところにそのま
ま持ってきても馴染みにくい。馴染まなけれ
ば、その地に根付かないということである。

違いの一つに言語がある。天理教の場合、
早くから天理外国語学校（現天理大学）が
設立され、海外布教伝道部（現海外部）内
にも翻訳課が設置されるなどして、すでに
多くの教義書が各国語に翻訳されている。
現在、天理教ホームページは日本語を入れ
て計 16 言語で公開されている。これは特
筆に値するだろう。

その中で、翻訳しづらいものが「みかぐら
うた」である。なぜか。「みかぐらうた」は、「お
ふでさき」「おさしづ」と並んで天理教の原
典と呼ばれ、教祖自らが作ったもので教理の
根幹が記されている。同時にこれは、天理教
の祭儀である「つとめ」の地歌でもある。つ
とめは 9 種類の楽器と、それによって演奏さ
れる音楽に合わせた「ておどり」とで構成さ
れる。「みかぐらうた」の文言は、つとめ
において「ておどり」の動作で表現される。仮
に英語に翻訳した場合、修飾語、述語などの
順序が変わってしまい、動作と合わなくなる。
それが今なお、韓国語を除いて、歌の意味自
体は訳されていても歌唱し踊れるようには翻
訳されていない一つの理由であろう。韓国語
の場合、日本語と語順が変わらないのと同
時に、長らく国内で日本語が禁じられていた
ことから結果的に、いち早く翻訳が可能にな
った。この「みかぐらうた」を訳す、言い換
えれば、つとめを外国語でもするべきか。

カトリックの場合、新旧約聖書は各国語

に訳されているが、ミサはかつてラテン語
で行っていた。これを、第 2 パチカン公会
議（1962 年～65 年）以後、各国語で
できるようになった。

一方、コーランはアラビア語で理解す
べきとされている。日本語版『コーラン』（岩
波文庫）の翻訳者井筒俊彦自身、同書の「解
説」で「ある回教法学的先生が…『コーラン』
を翻訳してはいけない。…だが日本語による
解説ということにして出版すればよい⁽¹⁾」と
述べたと記している。つまり、翻訳版はコー
ランそのものではなく解説書という理解だ。
しかし、イスラム教は世界に伸びている。

仏教も、経はもともとサンスクリット語
である。普通の日本人には、まったく理解
不能であるが、僧侶はそれを唱える。しか
し仏教もイスラム教同様、世界宗教である。
「みかぐらうた」の場合、信仰的に訳すべ
きではないという意見がある。これは神（教
祖）の言葉だから決して訳してはいけない
ということだ。上記コーランと同じ考え方
である。しかし、天理教は同じように神の
言葉である「おふでさき」はすでに 10 数言
語に訳されている。筆者の知っている限り、
「おふでさき」を外国語に翻訳するべきか否
かについての侃々諤々の議論はなく、当然
のように翻訳されていったと思う。筆者は、
これは天理教のリベラルと言うか開明的な
点で、長所であると思っているのだが。

いやそうではなく、上に述べたように、
語順が変わるので翻訳できない、つまり
技術的な問題ゆえに訳せないというので
あれば、今後大いにチャレンジしていく
べきであろう。いずれにしろ、海外布教
を見据えての議論はすべきであろう。筆
者は個人的には歌唱し踊れるように翻訳
したほうが良いと思っている。

[註]

(1) 井筒俊彦訳『コーラン』（上）、岩波
文庫、1964 年、299 頁。